

中山間地は日本の原点。守ります、築きます、中山間地域の暮らしを。

県政をもっと身近に！

県政報告

第8号

令和3年1月

島根県議会議員

高橋まさひこ

高橋まさひこ事務所 〒699-1251 島根県雲南市大東町大東1888 TEL0854-43-8057

新型コロナウイルスの感染拡大が深刻化し、大都會を有する都道府県で緊急事態宣言が再び発令されたが、変異ウイルスも含めた第三波の猛威に歯止めがかげられるかどうか心配である。そして県はそれらの地域との往来を極力控えるよう呼び掛けています。

さて、県議会では令和二年十一月定例会が開催された。主な質問内容は、①知事の政治姿勢、②新型コロナウイルス対策、③財政問題、④農林業問題、⑤JFしまね関連、⑥日立金属関連等々であった。本号では、一般質問についての報告と、「おろち号二十二年以降未定」の発表があった木次線について特集を組みました。

令和二年十一月定例会

(令和二年十一月十八日)

十二月十五日

高橋まさひこ 一般質問

①ふるさと教育と

定住について

②防災の見える化

テーマ 1

ふるさと教育と定住

人口減少が続く中で、島根県の「ふるさと教育」を受け育った子どもたちが、都会へ出て帰らないのは何故か伺いました。

問 ふるさと教育が定住にどのようにつながっていくのか考えを問う

答 新田英夫 教育長

就学前の地域での体験、小中学校でのふるさと教育、高校での地域課題解決型学習やキャリア教育を一体的に進め、子どもたちの夢や希望、地域への思いや決意の実現に向かって、必要な力を育てていく。そうした子どもたちの中から、島根に定住し、将来の島根を支え、島根を創る人材が育つものと考えます。

テーマ 2

防災の見える化

異常気象による歴史的災害が多々発生する中で人の命をどう守るのか、そのための見える化の必要性について伺いました。

問 ハザードマップの周知・活用状況について問う

答 山口和志 防災部長

市町村が作成するハザードマップには、大雨や津波による浸水想

定区域、崖崩れや土石流などの土砂災害の警戒区域、避難場所や避難所、そして警察署、消防署等の公共施設など、災害時に必要とされる情報が記載されており、災害に備えてハザードマップを知ってもらうため、様々な取り組みが行われている。

問 県として市町村と連携し、自主防災組織に働きかけ、地域における危険の見える化の促進が出来るか

答 山口 防災部長

平時において身近な地域の危険箇所や避難経路をハザードマップや現地を確認しておくことは、災害時の適切な避難行動につながる大変重要な取り組みであり、従来から市町村と連携して開催している自主防災組織リーダー研修で防災歩きを取り入れている。

防災歩きは、実際に地域を歩いて、危険箇所や避難場所の位置、避難経路を確認するほか、AEDの設置場所、病院や診療所の位置、災害対応自販機の場所といった防災資源についても確認し、その情報を掲載した防災マップを作成するなど、地域の見える化する手法を学ぶ研修を行い、これまでに五七〇人の防災リーダーを養成して、今後も継続して取り組む。

答 真田晃宏 土木部長

防災の見える化について、鳥取県の一部の地域ではモデル的に電柱等を活用し、浸水が想定される高さに表示板を設置し、河川氾濫による水害リスクをより実感できるようにしている。

島根県で管理する河川では、平成三十年から洪水により相当な損害が生じるおそれのある二十の河川について、おおむね千年に一度降る雨を想定し、この雨による洪水浸水想定区域図の作成を進め、六月に公表した。現在、各市町村において、令和三年度までを目標に洪水ハザードマップの作成が進められている。

松江市、大田市、美郷町などでは、各世帯への配布が完了している。河川が氾濫した際の浸水の範囲や深さなどについて、分かりやすい形で見える化することは、住民の皆さんに適切な避難行動を行っていただく上で有効と考える。今後、避難情報に関する見える化の主体となる市町と連携し、取り組みを進めます。



令和2年7月豪雨 桜江町 小田地区 (八戸川)

継続運行が心配される木次線

現在のJR木次線は、大正五年簸上鉄道株式会社として宍道〜木次間で開業され、昭和九年に国鉄線となりました。その後、線路の延長が行われ、同十二年の八川〜備後落合が開通し、現在は宍道〜備後落合（八十一・九km）となっています。

開業時から、木炭、砂鉄、米や牛など貨物輸送が行われていたが、昭和四十年代からの自動車の普及により輸送量も減少し、同五十七年に貨物列車は全面廃止となりました。年間利用客は同六十二年に約六十六万人もあり、通勤通学に利用され、人々の移動手段として欠かせないものでした。人口減少やマイカー通勤などにより平成二十八年には二十四万五千人と約三分の一にまで減っています。

平成十年四月から木次線利用促進を目的として、行楽シーズンにトロッコ列車「奥出雲おろち号」が運航され、同二十二年には県内外からの観光客一六、七二二人が利用する島根県の人気観光となっています。外部からの利用者の増加は木次線存続に大きなメリットがありますが、このトロッコ列車の運行継続が危

ぶまれています。利用されているトロッコ列車の耐用年数が既に過ぎていて、車検を受けながら運行されていますが、令和二年十一月二十日にJR西日本米子支社牧原弘支社長より「令和三年度までは運行できるがその後は未定」との衝撃的な発言がありました。

木次線は平均通過人数が三江線の廃止によりJR西日本の在来線（四十九路線）中から二番目（令和元年百九十八人）となりました。もともと、木次線は「第二次特定地方交通線」（輸送密度五百人/日以上二千人/未満）に指定され、廃止対象になってい

ましたが、「沿線道路が未整備である」として対象から除外された経過があります。当時に比べ、山陰自動車道尾道松江線の完成や国道・県道の整備も進み、加えて利用者も大幅に減少しており、現状の厳しさが増えています。さらに、新型コロナウイルスの流行は、JR西日本も大幅な赤字となる見込みが予想されています。

平成十八年三月に沿線自治体（松江市、雲南市、奥出雲町、庄原市）で木次線利活用

推進協議会を発足させ、観光客呼び込みのための対策が講じられています。また、民間の有志の方々がイベントを企画し、普段利用しない住民への働き掛けもされていますが、数値として十分な成果がでていません。ただ、こうした活動が住民への啓発に繋がっており、トロッコ列車が走る時間に併せ、住民が乗客に手を振っている姿を見かけますが、こうした努力についてはJR側も評価をされています。

昨春秋丸山島根県知事はトロッコ列車奥出雲おろち号に乗車された後、湯崎広島県知事も意見交換をなされました。丸山知事は木次線に対する住民の熱い思いを受け止め、存続していかねければならぬと決意され、新年度に向けて関係市町と連携し対策を講ずる準備をされています。

木次線存続には、利用促進のために住民の力が欠かせません。三江線存続のために各種イベントが実施されましたが、単発では利用客数が伸びません。オイルショック時にノーカーデーがあり、年配の人は木次線を利用した経験があると思います。沿線の官公庁、企業などの協力を得てこ

うした取り組みやトロッコ列車がだめならば代替する列車の運行を考える必要もあるのではないのでしょうか。



晩秋の山並みを背景に走るデーゼル車
(木次町寺領で昨年11月撮影)

うした取り組みやトロッコ列車がだめならば代替する列車の運行を考える必要もあるのではないのでしょうか。

いずれにしても、恒常的にふるさとの宝である木次線を守っていく運動展開が急務です。そのためには地域住民の理解と利用はもちろんのこと、奥出雲にゆかりのある県民や県外に住む人々、また、鉄道ファンや奥出雲を愛する全国各地の人々と一体となって、木次線への強い愛着心を表す運動が必要です。こうした裏付けが行政を力強く支え、JRとの交渉力となります。存続のために共に立ち上がりましょう！

カーボンニュートラル（温暖化の原因となる二酸化炭素濃度の上昇抑制）が地球規模で取り組まれる中で、勇気を持って一歩前に進むことが大切です。

編集後記

明けましておめでとございます。昨年は、新型コロナウイルスで明け暮れた一年でした。特に、私の所属する農林水産商工委員会は県内産業政策を検討する委員会であり、委員からの発言や各産業の代表者のヒアリングなどを通じ、県執行部へ新型コロナウイルス対策の充実と県民生活を守るために、取り組んできたところです。

年明け早々から第三波の新型コロナウイルスが蔓延し、大都会を有する都道府県では緊急事態宣言が再び発令されました。幸い、島根県では大きな感染はありませんが、発生多発地帯の方との接触が県内感染者の起因になっているようです。ワクチン開発が世界各地で進んでおり、臨床から投与が始まっています。一方ではウイルスも変化しており、研究者の方々の奮闘を期待するところです。

さて、毎年各地域で新年会を開催されてきましたが、第三波到来で中止となりました。県の情報や活動状況を報告する機会にしていましたが、できるだけホームページで報告したいと思っています。

地域活動にとつてコミュニケーションは極めて大切と考えます。しかし、高齢者が高齢者を支える中山間地では、重症化が心配される高齢者の安全確保が何よりも大切です。三密、ソーシャルディスタンス、手洗い、マスクをしての会話等コロナ対策実施の中でコミュニケーションを確保しなければなりません。最近、出入り口にあるアルコール消毒をしない方が増え始めています。無症状感染者が増加している中では、自分も感染しているのではないかと意識を持ち、コロナ対策を実行していくことが肝要だと思います。ワクチン普及まで頑張らしましょう。

